

生命保険：しくみと役割

預貯金との対比

平成20年1月

 生命保険文化センター

金銭管理の項目

・収入	……	得る
・支出	……	使う
・貯蓄	……	貯める
・借入	……	借りる
・保障	……	備える
・投資	……	貸す(殖やす)
・税金	……	納める

貯蓄と保障(表)

	主な目的	典型的な手段
貯蓄	目標額を貯める (教育資金、住宅購入資金など)	預貯金 (定期預金、郵便貯金など)
保障	経済的リスクに備える (入院、稼ぎ手の死亡、事故など)	保険 (生命保険、損害保険、健康保険など)

生命保険の仕組み－問題

◆ 問題

- ・健康な45歳男性(夫)が1,000人いる。
- ・1年間に2名が死亡すると仮定する。
- ・自分が死亡した場合に備えて、遺族の生活資金として1,000万円を残すには？

.....

- ・預貯金で備えるには？
- ・生命保険で備えるには？

回答：預貯金の仕組みで備える

- ◆それぞれが万が一に備えて、1年間に1,000万円を貯める。
- ◆死亡した場合には1,000万円を遺族の生活資金として使う。

(1,000万円を貯める必要がある。1年間資金が固定される。途中で死亡の場合には、1,000万円に不足する。)

回答：保険の仕組みで備える

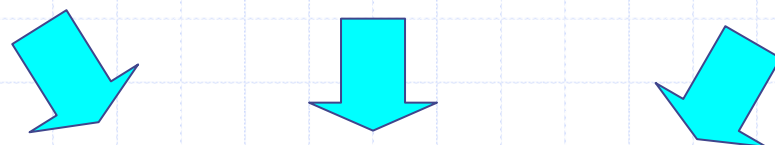
◆ 保険

- ・ 加入者1,000人が2万円を保険料としてファンドに支払う。(計2,000万円)
- ・ 夫が死亡した場合、遺族2名がファンドからそれぞれ1,000万円を受け取る。(計2,000万円)

(全員が少額の出費で済む。)

生命保険のイメージ

保険料2万円 × 1,000名 = 2,000万円

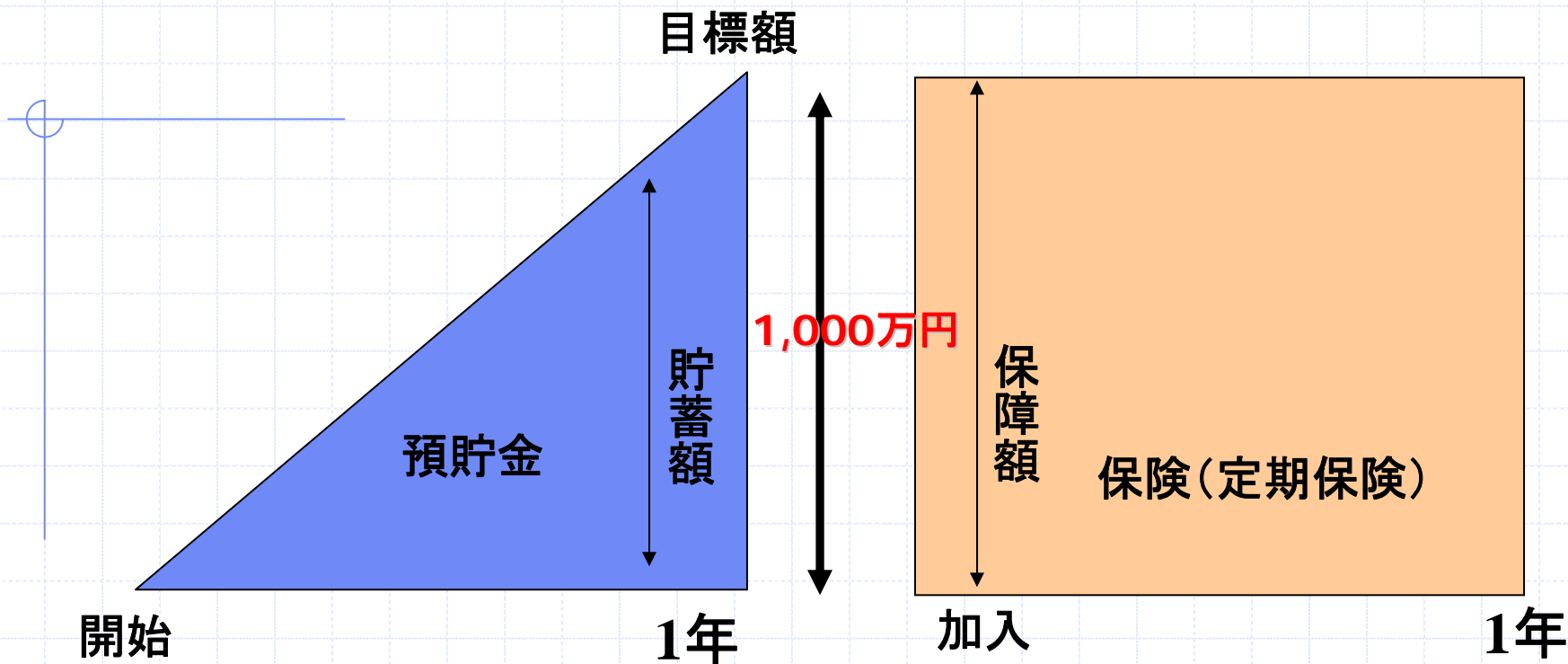


死亡保険ファンド



死亡者2名 × 保険金1,000万円 = 2,000万円

預貯金と保険のイメージ



- ・貯蓄とみた場合: 預貯金は、累計が貯蓄額となるので有利。保険は、2名が2,000万円を受け取るが、998人にとって貯蓄額は0円。
- ・保障とみた場合: 預貯金はそのときの残高が保障額となり不安定。保障に要する費用は残高と同額となり高価。保険は当初から保障額1,000万円で、保障費用は2万円と安い。

保険の仕組みー原理

$$\text{保険料} \times \text{加入者数} = \text{事故件数} \times \text{保険金}$$

変形すれば

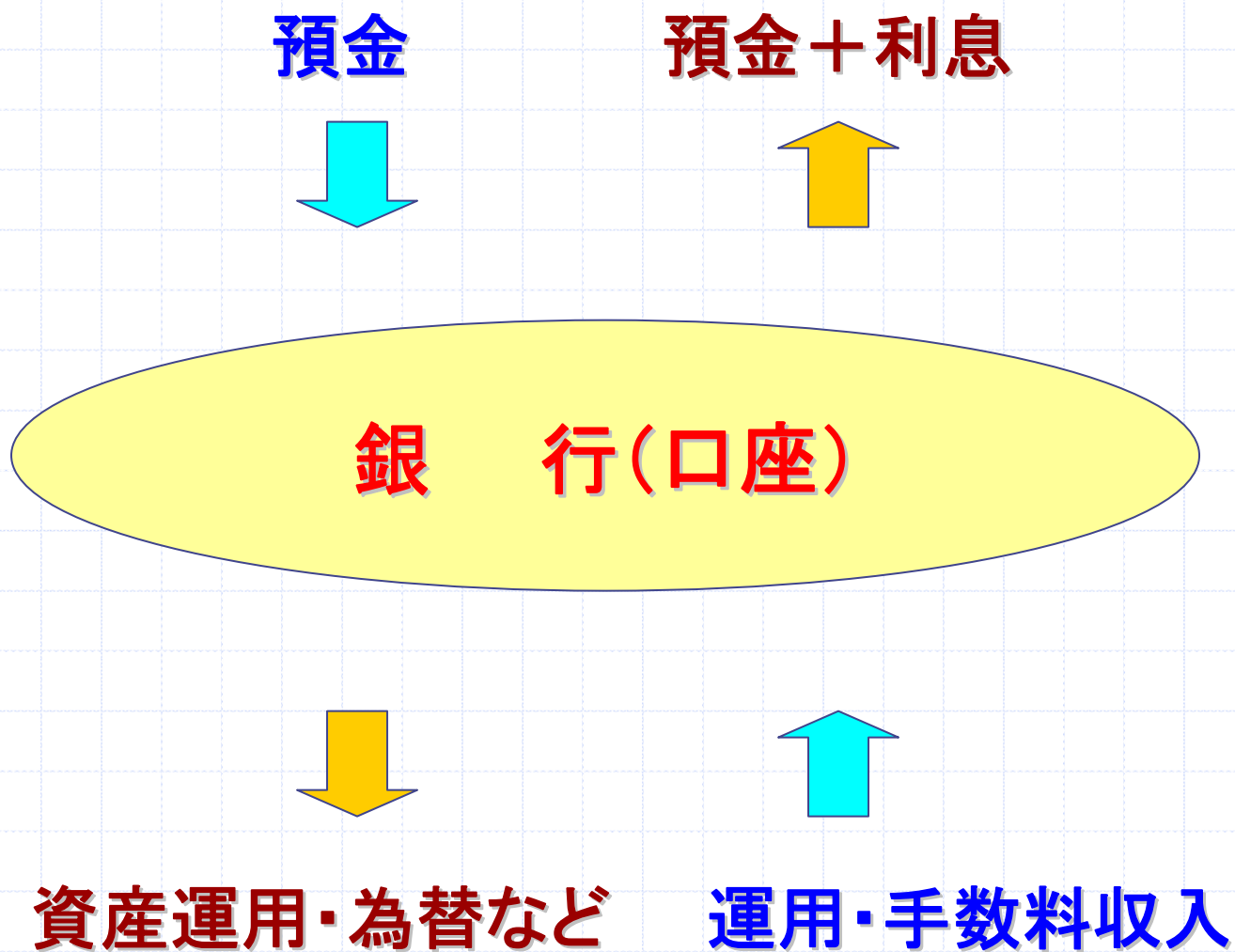
$$\text{保険料} = \frac{\text{事故件数}}{\text{加入者数}} (\text{発生確率}) \times \text{保険金}$$

- 発生確率はあらかじめわかるのか。
- なぜ年齢とともに保険料が高くなるのか。
- なぜ告知や医師の診査が必要なのか。
- なぜ目的に応じて保険の種類が異なるのか。

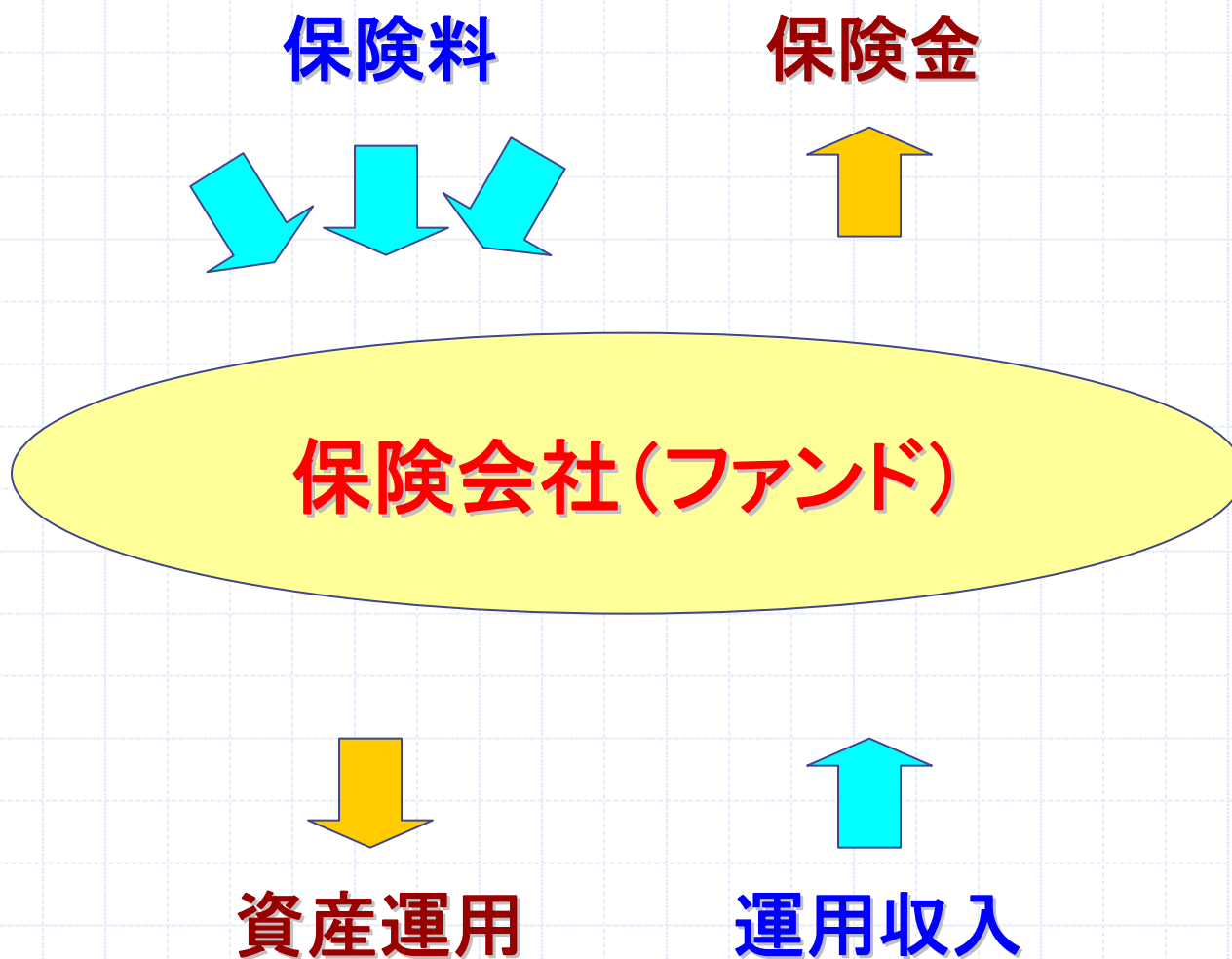
年齢別死亡率(1,000人当たり1年間の死亡者数)

年齢	男	女	年齢	男	女
0	2.80	2.48	45	2.23	1.11
5	0.14	0.11	50	3.44	1.76
10	0.09	0.07	55	5.51	2.49
15	0.22	0.12	60	8.50	3.58
20	0.54	0.27	65	12.54	5.15
25	0.62	0.32	70	19.85	8.57
30	0.72	0.36	80	57.86	28.12
35	0.92	0.50	90	157.38	103.33
40	1.38	0.74	95	235.55	173.79

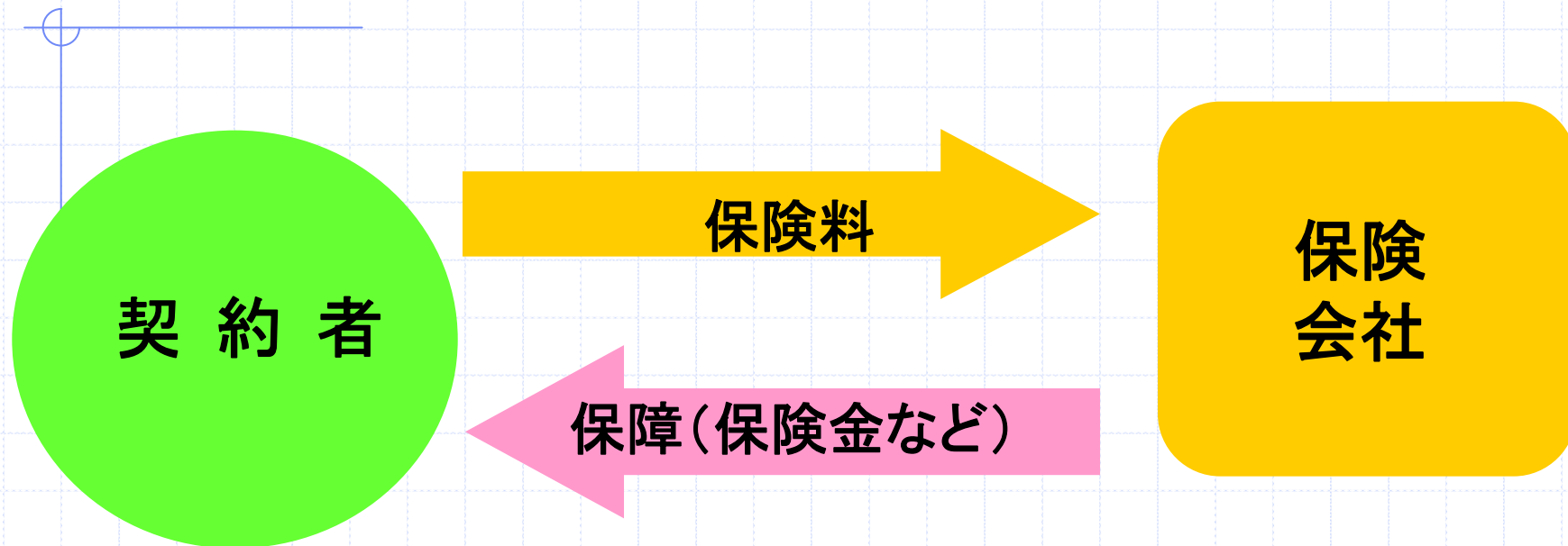
銀行の役割



生命保険会社の役割



保険は契約



- ・契約者は保険料を支払い、保障を購入している。
- ・保障目的を明確にして、契約内容を確認すること

生命保険の契約にあたってのポイント

- ◆ 自分の保障ニーズを明確にする。
- ◆ 公的保障制度、企業保障制度、預貯金などを考慮する。
- ◆ 生命保険会社、インターネットなどを通じて資料を収集、検討する。
- ◆ 契約する商品を決定する。
- ◆ 契約内容を十分に確認する。
- ◆ 契約を申し込む。

おわり